

## 第7章 女子補導団活動の実際－東京地区の動向を中心に－

ここでは、地域での各組の動向について検討しておきたい。とりわけ、本章では日本における戦前のガールガイド運動の中心ともなり、本部が設置されていた香蘭女学校の東京第1組 a とブラウニ、アンデレ教会を中心とした東京1組 b とブラウニ（後の第2組）、バルナバ教会・日本女子大暁星寮の第3組、当時の牛込区余丁町小学校の余丁町少女団（後の第3組）、東京女学館の第4組について、それぞれの活動の特色を、機関紙『補導団』および関連する資料を中心にあとづけ、指導的人物、各組結成の経緯、結成の背景、活動場所と内容についても確認したい。それによって、東京を中心とした補導会・補導団の実際について明らかにしたい。以下では、まず、第1節において東京地区の主たる指導者であり、補導会・補導団全体に関った人物について述べた上で、香蘭女学校、アンデレ教会、バルナバ教会・日本女子大と余丁町、東京女学館の順に考察を行う。

### 第1節 東京地区の指導者像

女子補導会、女子補導団に関わる人物、とりわけ各組でのリーダー的存在について考える際、補導会時代、さらに補導団への改組後においても、中心には聖公会の女学校と教会に関わる人々が存在した。補導会活動をはじめたグリーンストリートは1922年に日本を離れたが、ガイド経験者である外国人宣教師、彼女から指導を受けた香蘭女学校の教員、卒業生、関係者たちは、活動を継続していった。ここでは、まず、東京地区の代表的な人物として補導会、補導団運動全体に関わった次の人々をあげておきたい。

(1) 桧垣茂（ひがき しげる）香蘭を卒業後、津田英学塾に学び、東京女学館の教師を勤めた。国内の東京第2組（アンデレ教会）、東京第4組（東京女学館）で指導を担当しながら、1922（大正11）年から4回の世界会議、1924年のワールドキャンプにも日本代表として参加した。1942年の解散時まで総主事格の本部委員、国際委員として、多くの手続きを遂行した。1945年末、疎開先の福島県猪苗代湖畔で栄養失調のため逝去した。

東京女学館勤務を行いながら、芝の聖アンデレ教会で婦人伝道師をつとめ、教会内の宿舎で女子補導会発足当時は英国人ディクソン（Eleanor M. Dixon）と同居していたためディクソン所有の猪苗代の別荘をキャンプ地として活用し、香蘭、アンデレ教会、東京女学館、イギリス大使館関係者等との結びつきをはかった。香蘭女学校の同級（10期）には松本千（小泉信三の姉）がおり、補導団の後援を依頼している。

(2) 細貝（黒瀬）のぶ 香蘭女学校で女子補導会結成と同時に入会した人物であり、東京第1組およびアンデレ教会の1b、2組でリーダー的立場になった。戦後の再建にあたって、聖公会関係者の補導団OGを中心に呼びかけを行い、1948（昭和23）年にCIEと文部省が共催した初の青少年指導者講習会に参加し、ガールスカウト結成にむけた中央準備委員会の一員となった。戦後は鎌倉のミカエル教会のガールスカウトを担当し

た。父、邦太郎は戦前、英字新聞の記者であり、アンデレ教会員である。妹の細貝なおも香蘭で補導団に参加し、アンデレ教会員として戦後も活動した。アンデレ教会の神父の細貝岩夫も親戚であり、桧垣茂と戦前から親交があった。聖公会神父の黒瀬保郎と結婚し、池袋の聖公会神学校、沼津、茂原等の教会勤務に同行し、茂原時代には新しい組の結成（茂原少女会）を行った。

（３）櫻井国子 香蘭の30回生で女子補導会結成と同時に補導団入会し、妹の澄子とともに女子補導会、補導団で活動した。父は青山学院の教員、成明であり、母のよめは香蘭の5期生でアンデレ教会員としても桧垣茂とは交流があった。香蘭卒業後に津田英学塾に学び、さらに合衆国バークレーのカシュー大学で古生物学を専攻し、精華女学校の教員、さらに戦後は生物学関係の翻訳活動を行っている。本部役員として書記、さらに単独会員の事務局を担当した<sup>1</sup>。

（４）櫻井（吉田）澄子 香蘭33回生。香蘭女学校から津田塾に学んだ。その間、補導団では本部役員、国際委員等をつとめ、1937（昭和12）年にはアメリカ合衆国ガールスカウト連盟結成25周年記念のアンドレ・クラークでの国際キャンプに日本を代表して参加した。戦後は、ガールスカウト日本連盟国際書記・第2代会長を務め、青少年児童福祉会議（1950）の活動を行っている<sup>2</sup>。

（５）三田庸子 香蘭女学校の寄宿舎の舎監（1930～）という立場から補導団に参加した。日本女子大学時代G. フィリップの影響を受けて、聖公会教会で洗礼を受け、補導会、補導団の本部役員（会計）をつとめた、戦後は日本初の女性刑務所長となった。

（６）長谷川喜多子 女子学院からオックスフォード大学に留学し、1901年に帰国後、女子学院、東京女学館を経て香蘭女学校の教師となり、香蘭教員さらに教頭の立場から。三谷民子（女子学院長）、ガントレット恒子（嬌風会）とは女子学院同窓生であることから、女子教育の発展と地位向上を含め、協力関係にあった。長谷川自身は1924年の万国連合女子青年大会（ワシントン）に出席した経験を持ち、また聖公会の寄宿舎であるマリア館に居住し、ともに聖公会のイギリス人女性宣教師、東京女学館、女子高等師範附属高等女学校の生徒に影響を与えた。なお、ガントレット恒子の娘キティ女子補導会の東京国際組に入会している<sup>3</sup>。

（７）A. K. ウーレイ（Amy Kathleen Woolley・1887－1976） 戦前・戦後を通じて女子補導団（会）・ガールスカウトに関わったイギリス SPG ミッションの宣教師。ウーレイは1887年にロンドンで生まれたが、1915年に27歳で来日し東京女学館に着任した。やがて聖アンデレ教会で桧垣茂に入団のピン付けを受け、香蘭女学校に隣接する聖ヒルダ陽光ホームの東京第1組ブラウニ、東京女学館にある第4組の指導の指導を担当した。1923（大正12）年の東京大震災で東京女学館が焼失してから香蘭女学校に移り、第1組と本部に関わるようになった。盛岡、長野、大宮等の組の結成と入会式にその都度赴いている。

1939年には神戸の松蔭女学校に移り、1941年の日米英開戦後も日本にとどま

るが、補導団解散を見届け、1942年7月に、最後の日英交換船である龍田丸で同僚の M. ヘールストンと帰英した（香蘭女学校は1941年に旗の台校舎に移転したが、城南地区師団司令部・学校工場になり、複数の教師が辞職、主教は拷問を受けた。45年5月24日の空襲で校舎は全焼）。戦後、空襲で焼失した校舎が再興され始める47年末、ウーレイは再来日し、旧第1組の再建と、またガールスカウト日本連盟としての再建にもプログラム委員長として関わった。

(8) M. E. ヘールストン(Mary Elenor Hailstone・1889-1979) イギリス SPG ミッションの宣教師として1920年の来日以降、三光教会に所属し、東京女学館、香蘭女学校で英語教員を担当しながら女子補導会、女子補導団活動を指導した。ウーレイとともに1942年にイギリスに帰国するが、1947年再来日している。

○E. G. フィリップ (Elinor Gladys Phillips・1872-1965) イギリスのSPG ミッションの宣教師として1901年に来日し、聖公会の南東京婦人同盟会に所属する。イギリスではケンブリッジ大学の大学院で生化学を専攻し、その経験から香蘭女学校、さらに日本女子大学で教員をつとめた<sup>4</sup>。補導団としては、東京市内牛込のバルナバ教会員および日本女子大学の暁星寮の学生を対象とした東京第3組を担当した。日本女子大学生のガールガイド活動の困難さから、単独会員への対応および学生指導を中心に行い、1941年まで在日した。

(9) D.E. トロット (Dorothea Elizabeth Trott・1885-1968) 1910年にイギリス SPG ミッションの宣教師として来日し、アンデレ教会に所属して東京女学館で教員をつとめる。東京女学館の東京4組の他、アンデレ教会の活動支援も行った。1922年の一時帰国から1923年9月に再来日した際に、関東大震災によって横浜上陸が困難であったため、神戸港から上陸して半年間、神戸の松蔭女学校で教員をつとめる。ちょうどこの時期に松蔭ではマシューズ (Vera Laughton Mathews) によるガールガイドの講演が行われている。1941年にイギリスに帰国しているが、戦後1947年に再来日して1957年まで東京女学館で教えている。トロットはウーレイとともに戦時期をはさんで長期間日本で英語教育を担当し、その意味では日本の女子中等教育に貢献した代表的人物でもある。

なお、トロットは英語教育と女子補導団以外に、女学校の洋装化でも影響を与えたひとりとされる。大正期から昭和初期の補導団活動期は女学校生徒が和装から洋装へと転換が行われた時期でもあった。ちなみに、松蔭女学校では1925（大正14）年度からのセーラー服の導入が決定しつつあったが、同窓会幹事の江越千代が東京在住のトロットに相談した上で現在のワンピース型に変更され、決定したことが記録されている<sup>5</sup>。また、東京女学館においてもトロットが中心になって、1925年に洋装化に対応した「洋服を召すお嬢様方へのご家庭へ」という印刷物を配布している。これは、当時じゅうぶん定着していなかった女子学生の洋装着用の注意事項を記したものであるが、この動きの中で1930（昭和5）年、現在の白を貴重とした制服が定着した、というもの

である<sup>6</sup>。単に服装の変化のみの問題でなく、日本の都市化、近代化の中に女学校生徒のライフスタイルの変化もあったこと、それに関わった人物が同じく女子補導団指導者のひとりであることが興味深い。

以上から理解されることは、東京地区では香蘭女学校と聖公会のアンデレ教会、バルナバ教会を中心として、そこに所属するイギリス人女性宣教師、日本人教会員とその人間的つながりを軸に女子補導団の活動が展開されていったことである。そのつながりは、地方都市に、また、戦後のガールスカウトにも連続していくのである。

## 第2節 東京第1組 (a) - 香蘭女学校

第4章で述べたように香蘭女学校に設置され、東京第1組と呼ばれる日本最初のガールガイドとなった。1920年に結成され、12名の香蘭の各学年生徒と刺繍部員の志望者で構成され、最初の団員は校内で集会をし、「わすれな草」「桜草」という二班であった。東京市内の芝白金三光町に位置した当時の香蘭女学校は近隣に欧米の大使館と家族の居住施設、外国人の子どもたちが通う聖心女学院、さらにアンデレ教会が存在した。ガールガイドが国際的認知を受けはじめたこともあって、香蘭女学校内の第1組に関心をよせた在日外国人の子どもを対象とした国際組、アンデレ教会に集まる信者たちを主たる対象とした組が1bとして結成された。このアンデレ教会の組と区別するために一組aと称された時期がある。東京第1組には、香蘭女学校内の児童施設、聖ヒルダ陽光ホームでブラウニが1921年に発足している。当初、当時は東京女学館で勤務していたA.K.ウーレー (Amy Kathleen Woolley) が主たる担当者であった。

東京全体の団長にはバンカム (Buncom) が務めた。戦前の東京第1組の組長は初代グリーンストリート (Murel Greenstreet) をはじめとして、しばらくはイギリスから派遣された聖公会宣教師があたり、副組長は日本人女性の香蘭教員および香蘭女学校の卒業生が担当している。先にも述べたように、彼女たちは、その後の補導会、補導団、さらに戦後のガールスカウト運動でも指導的役割を果たした人物が多い。戦前の組長、副組長は下記の通りである。

### ○組長

M.グリーンストリート (Miss Muriel Greenstreet)

T.C.ウィリアムス (Miss Theodora Caroline Williams)

A.K.ウーレー (Miss Amy Katherine Woolley)

M.E.ヘイルストーン (Miss Mary Elenor Hailstone)

### ○副組長(カッコ内は結婚後の姓)

荒畑元子—香蘭第10回卒業生・1903年卒—香蘭教師

石田 (高橋) 光子—同上、第29回・1922年卒

竹井（森山） 富美子一同上、第30回・1923年卒、女子補導団事務局  
関根（宮澤） 八千代一同上、第32回・1925年卒  
森ひな子一同上、第33回・1926年卒  
木藤（松本） 信代一香蘭教員、戦後、千葉市川聖公会  
櫻井（吉田） 澄子一香蘭第33回卒業生・1926年卒、戦後ガールスカウト日本連盟2代会長  
稲田旭子一同上、香蘭第38回卒業生・1931年卒  
龍崎恭子一香蘭教員

以下では、東京第1組 a の実際の活動について、機関誌『女子補導団』の記事から確認してみたい。

1926年度、東京第1a組長のヘールストーンによれば、毎週の集りに28人の団員が出席していたが、入学試験準備等で多少減少したこと、14名が入団して2級章を9人が獲得し、21人は精勤章、10人は看護章、1人は美術章、他の1人は欸待章をとっている。さらに、音楽章、通訳章、調理章、運動章のために各7人が準備中であること、森ひな子が第二副組長を、外国人団員をミス、ドルイット（Isabel Mary Druitt）が指導していること、が報告されている<sup>7</sup>。また、夏7月13日から17日まで、16人が参加して逗子の聖ペテロ教会を拠点とキャンプが行われ、ヘールストーンその他、ウーレイ、T. ウィリアムスが指導にあたっている<sup>8</sup>。

1927年度になると、集会について次のような報告があった<sup>9</sup>。

私達は毎週土曜日の午後白金の岡の上で集りをいたします。私達のこうした静かな岡の上でのつどひはほんとうに幸福なものでございます。私達の組は他のどの組より大きいものでございますのではじめのうちは中々統一も困難の様に感じられましたがいつか団員の気持ちの一つひとつに合せて今ではそうした懸念も全くなくなって皆仲良く楽しくすごして居ります。最近の私達の生活は先づ全部を三つの部分にわけて服装点検、お話、ゲーム等をその日のプログラムによつてみんなで一緒に時を過ごした後その三組は一組はミセス・マーサーに看護法を教へていただき一組はお料理のおけいこをし一組は信号や又は封筒をこしらへたりいたします、私達はミセス・マーサーの様な立派なお方を先生として学ぶ事が出来ますのはほんとうに幸福でございます。団員は先生のお教へを熱心に学び又研究する事につとめて居ります。

ここには、毎週土曜午後から会がもたれたこと、3組で構成された活動は看護法、料理、手旗信号の練習が行われていたことがわかる。なお、文中のマーサーはSPGミッションのMrs. Mercer（在日、1927-1932）であり、組長等の指導者以外の補導団活動への協力が理解される。

同じくブラウニについては次の通りである<sup>10</sup>。

私共のブラウニーの集りは毎土曜日にして居ります。一中略一尋常一年生から六年生まで居りますので集りの時する遊び等も思ふ様に出来ませんが、補導団の御本にしたがつて一つのをみんなおへるまでお互ひに教へながらして居ります。組を三つに分けて『ねこ、うさぎ、犬』の組に分けました。そして七人を一組として居りますがこれはきまつた数で集りの度びに子供達の集ります数が変わつて居ります、組には一人づつ組長があつて自分の組のめんどうを見る様にして居ます、又新しい子供が入会する様な時は組長は其の子供のめんどうを見る様にして居ます、たとへば結び方や包帯のまき方の出来ないことを見る様にして居ります、毎週集りの度びに何かお話を聞きながら小さい仕事を致します、それがすみまして色々な面白いゲームをしたりダンスをしてだんゝと集りの意味がわかつて来てお互ひに美しい友達になつて行くのを見てほんとうにうれしく思つて居ります、又この様な子供の一人でも多くなつて行くことをのぞんで居ります。

以上からは、土曜に会がもたれたこと、7人を一組とした3つの班があり、それぞれに組長がおかれ、活動内容としては紐結び、包帯巻き等の課題の他に、ゲーム、ダンス等が取り入れられていることがわかる。

1928年度、竹井富美子からの報告では、イギリスから帰国したウーレイからの報告会、団員33人による奥沢ピクニック、土曜午後のゲームを中心とした集会の他、「日本の団員の中に一級団員が一人もないと云ふ事は大変残念な事だと思ひますので最近では堅実な一級団員を一人でも多く産み出す事が出来る様に知識の養成自然研究応急手当等に力をつくす」<sup>11</sup>ことが課題として述べられている。一級団員は国際キャンプ等へ参加する上での基礎的資格でもあり、国際化のための課題のひとつであった。

1929年度については、第1組が「普通団員四十七名。少女団員二十一名指導者六名」<sup>12</sup>であること、班単位で小児看護法看護法、料理法等を学び、上達章と第1級団員希望者が準備を行っていること、7月14日－19日には箱根芦ノ湖畔で16人参加のキャンプ、秋には郊外ピクニックが実施されている。また、クリスマス用に4枚の小児夜具が制作されて聖愛産院におくられた。ブラウニは毎週月曜日の午後に集会が行われている<sup>13</sup>。

1930年度は、「第一組普通団員四十名、指導者二名、毎週土曜日のお集り」<sup>14</sup>が行われ、1年間に9名の新しい団員が加入し、料理と看護法を学んだ団員のうち、日本独自の日本料理章、4人が看護章を取得したことが報告されている。9月には、小児看護法を学ぶ組がつくられ、ブラウニー担当の島田の指導を受けた。精勤章11人、音楽章、刺繍章取得も記録されている。5月の入団式には林富貴子、団長バンコム夫人が出席し、春と秋のピクニックと夏には富士の裾野でキャンプが実施された。第一組のブラウニでは毎週月曜日午後の集会が20人（フェアリー、スプライト、グノーム）で継続された。小さい雑巾づくりをバザーで販売し、その代金は「千葉の教会の新しい聖堂」<sup>15</sup>のために献金された。

1931年度は、第1組では活発な集会在毎週行われたこと、慈善事業として帝国ホテルの音楽と影絵の会には多くの団員が参加した他、クリスマス前日にも、麻布の養老院で影絵とクリスマス劇の上演訪問を行った<sup>16</sup>。夏には保田海岸でキャンプが行われている。第一組ブラウニについては以下の報告があった<sup>17</sup>。

わたくしたちは、去年秋頃、入団した九人のお友達を御紹介して共に喜んでいただきます。まだ入団にしないお友達は、五、六人居りますが、ブラウニが好きになって、喜んでお入りになる日を待つてゐます。去年十一月には教会のバザーに、前から作つてゐた、ラファイア細工のナプキン、リングと、土瓶しきを出品いたしました。皆さん、きれいで安いので買って下さいました。去年のクリスマスには、ガイドの方と御一緒の日に、お集りをいたしました。わたくしたちは、ガイドの方々には内証でこつそりと、別室で祝会の用意をしたのです。そして不意に喜ばして上げやうといふ計画なのです。お湯を沸かし、お菓子を並べ、お茶碗を運んで席をこしらへました。正面には、イエス御降誕の馬小屋をお人形で飾りました。さァこれで出来上りました。そこへ何気ない振をした組長ウーレー先生や竹井先生に連れられたガイドの方々は、お部屋を開けてびっくり……まァ嬉しいわ!!! そして銘々にカードや美しい御本を頂いて帰りました。その日ほどお得意だつた日はありませんでした。

以上からは、当時のブラウニの少女たちの発想と表現そのものがあらわれ、同時に、補導団の普通組と連動した少女の活動、ウーレイと竹井富美子の指導、また教会活動としてのブラウニの様子が理解される。

1932年度の東京第1組に関しては、集会ははじめの出席調及服装点検の意味について述べられている他、7月21日から25日までの塩原福渡の三島副総裁別荘での各組合同キャンプ、クリスマス時の全員出演による聖劇について述べられている<sup>18</sup>。第1組ブラウニからは、毎月曜日午後三時から、香蘭女学校の体操場で集会が開かれていること、1月に6名の新入団員を加えたこと、小学校の上級生が放課後の勉強や用事のために遅刻すること、ブラウン、アウルでは、ミス・ウーレイ考案による種々のゲームが少女たちに好評であることがについて述べられている<sup>19</sup>。

1933年度の東京第1組は、23名のガイドと1名の指導者（ミス、エドリン）が入団し、48人の会員が存在すること。行事としては、下記のことが示されている<sup>20</sup>。

- 6月3日 麻布の高松の宮邸で、信号やゲーム。
- 7月21日－25日 横浜 YMCA のテントを借りて各組合同キャンプ
- 11月11日、18、25日 内田千重子の指導で、4組と合同の栄養料理講習－老人・病人・幼児向けの料理
- 11月18日－ 英国大使館のガイド、ミセス・マークレーによるダンス講習－スコットランドのダンスを習う

○6年間指導を受けた竹井富美子が結婚のため、長崎へ一後任は桜井国子

○1934年8月スイスで開催される万国ガイド相談会への出品のため、着物の裁縫、絵葉書、お手玉の作成

以上である。第一組ブラウニが集合と内容の問題から、次の活動停止の報告があった<sup>21</sup>。

実は昨年冬から中止の状態なのでございます。原因はと申ますと、集りが非常に悪いので、その上この組はいつも同じ場所に生活して居る一処から皆来るものですから、子供同志がつひ馴れつこになつて、それがブラウニの訓練中にも遺憾なく發揮されて、打つ、叩く、騒ぐといった光景を度々現はすのでございます。ですから指導者は相談の上、彼等が過去の楽しかつた事を想出して、今度は心からまたブラウニに來度いと申出て来るまで見合せませうと待機の姿なのでございます。

### 第3節 東京第2組（第1組b）－聖アンデレ教会

この組は、東京市内のアンデレ教会で活動を行った組である。もともとは、1920年に香蘭女学校の第1組から分かれる形で発足した組であるため、1組bで呼称された時期があったが、同じく香蘭で外国人子弟を対象に活動した国際組（第2組）が活動を停止したことにしたがって1923年頃からアンデレ教会の組が第2組と呼称された。アンデレ教会の組では、東京第1組でも述べた聖アンデレ教会婦人伝道師、東京女学館教師の檜垣茂、香蘭出身の細貝（黒瀬）のぶ、女子学習院卒で英国留学経験を持つ溝口歌子、樫戸けい子がリーダーをつとめた。教会での集会活動ゆえにより聖公会の活動と結びついた活動が行われ、アンデレ教会に通う香蘭女学校以外の生徒、単独会員、特別賛助会員が参加した。日曜学校生徒を中心に東京第2組ブラウニにも結成された。

アンデレ教会の活動、さらに当時の補導団の活動を理解する上で具体的手だてとなる日記が残されている。1924（大正13）年1月から12月までの細貝のぶの記録を以下に提示しておきたい<sup>22</sup>。

#### 出席名簿および会費納入記録にみる参加者の記録

（氏名 住所 活動開始時期 班名）

細貝ノブ	芝区栄町8	1923（大正12年）12月以前	鈴蘭
宮川愛	芝区栄町16	1923（大正12年）12月以前	鈴蘭
山田チエ	芝区西久保広町25	1924（大正13年）1月以前	鈴蘭
野口アイ	麻布区仲ノ町4	1924（大正13年）1月以前	鈴蘭
村木シン	芝区 三田 三田高等女学校内	1924（大正13年）1月以前	鈴蘭
牧野春子	芝区三田 三田高等女学校内	1924（大正13年）9月	鈴蘭
白井清子	麻布区桜田町17	1924（大正13年）9月	鈴蘭



小西道子 芝区白金三光町 257 1924 (大正 13 年) 9 月ー 鈴蘭  
 入戸野まり 麻布区瀧土町 63 1924 (大正 13 年) 9 月ー 鈴蘭  
 宮川秀子 芝区栄町 8 1924 (大正 13) 10 月ー ブドー  
 宮川敬子 芝区栄町 8 1924 (大正 13) 10 月ー ブドー  
 細貝ナホ 芝区栄町 8 1924 (大正 13 年) 10 月ー ブドー  
 瀧田伊楚 芝区栄町 8 1924 (大正 13 年) 10 月ー ブドー  
 松浦久 芝区栄町 9 1924 (大正 13 年) 10 月ー ブドー  
 後藤三重子 1924 (大正 13 年) 10 月ー ブドー  
 溝口歌子 府下千駄ヶ谷町穩田 164 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 溝口とよ子 府下千駄ヶ谷町穩田 164 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 桜井くに子 府下駒沢村上馬引沢 1376 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 桜井すみ子 府下駒沢村上馬引沢 1376 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 中條静子 芝区白金三光町 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 徳川恵子 芝区綱町 1 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 中尾栄子 芝区綱町 1 1924 (大正 13 年) 10 月ー ヘアベル  
 (この他、団員名簿欄に中村、谷口、遠藤、向井きよ、の名前ありー活動時期等詳細不明)

活動記録

大正十三年

一月七日 新年親睦会

会員出席者十六人 第一 B、A、第四、

十一時半より会員一同食事 十一時半より会員候補の方々を御まねきし

三十人位の集会にて四時迄楽しく遊ぶ

プログラム

一、開会の辞 井原民子 一、会についての御話し 桧垣先生

一、キムスゲーム 記憶競争 一、静な御遊び

茶果

一、ダンス 一、馬蹄形となりて 一、団歌 一、会の御祈 一、敬礼  
 以上 会の会計

一月十二日 (土)

出席 十一人

志望者三人

新しい人方々、紐結び、標語を教え、三時より競争会議を二三する

先生より契約の二についての御話承り、君が代二回歌ひ散会す

旧い人々は残り震災後より作り上げし、着物類を草津に送る。(荷造りして)  
ダンスの第一の口元を習ふ

一月十九日 (土)

出席十二人

志望者三人 前会のと同人

新しい方々は紐結びのおさらひ 会則の書いた残を差上げる

普通会员の方は火事の時のはしごの作り方、及び兜の紐結びを習ふ

三時よりダンス全部習ふ 先生の御話し

君が代の二回合唱 散会

旧い人は俊子さんより汚点ぬきを承ふ

三月十五日 (土)

午後二時集会

志願者の御習ひ 包帯巻きの練習 ダンス

御遊び 新しい陣取り

馬蹄形 御別れの御言葉 星を戴く 宮川俊子、秀子、愛子、細貝のぶ

御祈り 君が代 散会

三月二十一日 (金)

午後二時 集会所に列長集まる

明日は愈々桧垣先生のご出帆であるが、先第一に御見送りの事に就いて御相談する

どうしても送るなど先生はおっしゃったが、先生の御洋装姿と震災後の横浜と

或方達は船の御別れを見度いと好機心(ママ)で、到々行くときまった

前から買ってあった箱にブルーの切を張った あまり立派に出来上がったのでうれしい

今日から私共の長年の計画の手初めである

今後第一土曜 第一、第四合併の遊び会、一週おきに二級会員の徽章の為の集会

日記を会毎に級の長が列によってつける、

四人の新しい方々を四月の始めに出来るやう準備を急ぐ事等色々きめて

三時過ぎに会を散じる

四月六日

溝口歌子さま御受洗

四月十二日

山田ちえ子、野口愛子、村木しん子様、御入団遊ばす

五月二十四日（土）

プログラム

普通会员

団の規則の応用 紐結びの練習 赤十字について

二級団員

百駈を二十秒のマラソン 一本のマッチにて火を起す 縄飛 縄廻し

戦場出婦人よりのナイティンゲールとヘンリー・ジュナン、赤十字社について御話し、

袴の結び方 健康の法則 御遊び 馬蹄形 君が代 御別れ

出席者十人

入団志望者なし

六月七日（土）

今日は近所の者 六名他出席者なし

草花植換への為 花壇を作り 三時半より馬蹄形 キミガ代 御別れ

六月十四日（土）

第四の井原様御越し下され、色々の御手伝ひ下されました。

プログラム

普通会员と二級の者と別れ戸外青々とした教会の御庭にて、各々場所を占めた

普通団員 二級団員

道案内、追跡のしるしを教へ、屋内に入りて、道案内の記しの画及び

感電と瓦斯中毒の応急手当と溺死者の人工呼吸を習ふ

其の間普通団員は改正規則を写す。又、紐結びの試験等なす

三時半より屋外にて遊び 狐 センター 馬蹄形 君が代 別れ

翌日曜日

聖職按手礼 草花を溝口氏宅より教会の庭に移す

聖礼草花の経過悪し 桧垣先生へ御手紙を送る

月曜 苗の為に近所の者集まる。

六月廿一日

常の通り二時半より開会

二時より宮川秀子 細貝信子 会の相談する

改めて補導団の主旨と本来の目的を御話しす、補導団規則を皆が写す。

二級、普通。志望者別になり

二級、普通団員、木等の高さをはかる法を教へ

団員志望者（六人）

団員に成る時の試験課程を学び敬礼及び笛の意味、会員規則、契約結び方 六種

戸外に出で 一、二、三、 狐

四時より五時迄、芝公園内を二組に分れて追跡をす 馬蹄形 君が代

団の祈り お別れ 出席者十五人

六月廿八日

二時より

二級、普通、志望者の三組に別れ

二級 一級になる仕度 料理 観察について

普通 赤十字 その他二級になるについて凡てのこと

志望者 団員になる仕度

遊び 三時半より コーナースプライまがひ 一、二、三、 馬蹄形 君が代 御祈り

出席者十九人

櫻井くに 宮川ひで 細貝のぶ 櫻井すみ 宮川けい 宮川愛

溝口うた 瀧田いそ 山田ちえ 溝口とよ 細貝なほ 野口あい

村木志ん 白井清 牧野（春子） 小西道 徳川（恵子） 遠藤三重子

中尾（栄子） （カッコ内著者）

七月五日

夏休み中の宿題について 守るべきこと すべきこと

二級の人 木の高さ 川の中を計る実地 普通団員になる御稽古 お別れ

七月十三日

女学館にて

七月廿日

村木志ん子さま御受洗

九月五日

山田潔子様御葬式

潔子様の御葬儀に団員一同出席

補導団員のしごと

合唱隊として歌の練習に四日午前七時半より集合。

制服を間に合わせる迄に造った。五日午前より午後にかけて会堂の掃除、聖壇の飾り、プログラムくばり 花環はこび 弔辞のべ 正列して敬礼 柩を送る

九月七日 日曜日

心をこめて栽った御花を聖殿に捧げることのかなった嬉しい日。

私共団員も此々捧げられるものであるということを絶えず心に止めて居り度いと思ふ。

九月十三日

十二人集合 開会二時半

草津ヘスウェーター 一ツ 肩掛け 一ツ マント 一ツ 謙 肩掛け

オチャンチャン 一ツ 荷造りして送付する

御買い物隊は、縄、荷札、切れ等を買ひ集め、御花環の代六円を摂って来る、ブドーの組では箱をこしらえ、ヘアベルでは入団志望者の下しらべを引受けて熱心に御勉強、後に上達章を戴く順備のお稽古で二級の方々御料理の御話等して四時半散会する。

志望者の出席数二名 徳川恵子 中尾栄子

九月廿日 土

二時集会

信号をイロハニホヘトチリヌルヲワカ迄学ブ 戸外にでゝ救助遊びをする

志望者の試験 キムスゲーム。入団式の御稽古 君が代 別れ。

志望者の問題提出

一、父母又は保護者の許可は得ましたか 二、是非は入り度いと思ひますか

三、契約を御書きなさい 四、規則を御書きなさい 五、何故敬礼に三本の指を示すか

六、敬礼の時如何なる顔、如何なる姿正をするべきか

七、日の丸と日章旗の出来た年を問ふ。

八、笛の信号、左の笛の意味を問ふ。

一。 一。 一。 一。 一。 一。 一。 一。 一。 一。

九、六種紐結びの各々用途を問ふ 五種の体操各々の効用 以上

九月廿一日 日曜日

礼拝後入団式

鈴 牧野、小西、白井 ヘアベル 徳川 中尾 葡 後藤 諸氏入団

九月廿四日

組長御帰朝

九月廿七日 土

二時半集会

包帯巻の練習 馬蹄形に広って契約及び規則の暗誦三回 戸外に出で 五種の体操  
遊び コーチスプライ 旗取り遊び 縄飛び競走 馬蹄形 祈り 君が代 別れ  
終了

出席人数 十九人

新しい入団希望者二名 入戸野まり

集金 散会后 班長会議

十月四日 土

二時集会

包帯練習 頭、肘より手首迄、ひざ頭よりくるぶし迄

ひざ、掌、の巻帯及び三角帯の掛け方を教ふ 円になって規則の暗誦四回

数当て遊びの正答者三人

戸外出で 正列 分列等の練習 体操 救助 結び遊び コーナスプライ 旗取り

馬蹄形 祈り 君が代 別れ

牧野先生より拝借した御茶を一人一人持ち帰へる

出席者十七人 内志望者入戸野まり 各組一人づゝ欠席

集団最初の形式を制定しては如何 何時でも出来る補導会劇を作り練習して置く事

今年のクリスマスにする何か余興 音楽に就いて 自発的に

各個人の個性を活しもっと深く特殊の 得意の方面を研究会得する為に

班制度を行ったり 班長として団員を近く知ることが出来 秩序正しくなり

研究心が強められもっと興味を覚えると思ふ

運動、音楽、看護、料理の各班別を 大工、手芸、会計、書記の人選

外交、買物掛り、書籍掛り、補導会智識を得たる為本を集めて小さな図書部を作っては

近き内に、他団の参観、遠足の下稽古、火を起したり等

十月八日 木

集会所にて三時半より列長会議を開く。

山田潔子氏の後任として細貝信氏、副組長とせらる。

十月十一日

二時より組長の御講話あり 三時より戸外にて体操及び遊びをなす。

十月十八日

栄と教区時報を折り名簿に徒って差す。

組長以下班長は其の間毎月最終の土曜には普段聖書の御稽古の無い人に

桧垣先生の御話をして戴き、

其の他は出欠席無しでバザーの仕度等何かの為の御仕度会にすることを定めた。

戸外で会の始め方の御稽古をする、体操を歌子さんの指南でして先生に見て戴く。

御祈のりに見えた溝口正さんと一緒に

先生がフランスより教□で□□□いるハンケチ取りと聴く練習の遊びをした

出席 ・第四 長崎、平田、松田、伊能、ミス・ウーレー

・ヘアベル 溝口うた、溝口とよ、桜井すみ、徳川恵

・ブドー 細貝ナホ、宮川敬、瀧田いそ

・スズラン 向井、小西、山田 十七人出席

いつもの縄飛をして、君が代斉唱 散会す。

十月二十五日

今月最後の土曜であったから、先づ丈ぞろひする迄徽章を磨き

聖書の御話し受聖餐者と未信者の二度にして戴き残りは英国より

習っていらっしやった藤編みを習ふ。

朝鮮大学生の□□□来た飴をなめて楽しく散会した。十人出席

終りにカンパニードリルを練習した。

十月卅一日

1、お弁当を芝生の上で円くなって

2、Company drill をして正列の馬蹄形に成り桧垣先生の御話し

3、各班二人の組に列し各班の紐結び競争をしてバラの組が勝った。

4、リレイ、レースを各組から四人で選手を出してヘアベルが一であった。

5、信号をしたが意味が余り不正確であった（東京第一Bはぬけた）

6、駅より学校迄の観察競走 ブドー

7、強盗遊び

原の中央に集って御報告を戴き、君が代一唱 散会した。

出席者凡七十人（ママ） （正、卒三）

第一東京Bは 組長、副組長

スズラン 宮川愛、白井清、山田ちえ、牧野はる

ヘアベル 溝口歌、桜井くに、すみ子、徳川、村木しん子  
ブドー 宮川俊、宮川敬、細貝ナホ、瀧田いそ、後藤、  
会計 十六人 出席した。 会の始め方を会員の前で御目に掛けた。

十一月八日 土

十一月十五日 土

二時半より開会 人数のそろふ迄紐結びの練習をした。  
先生が御庭より集めていらした木の葉を一行に成って御隣の室に熟視しに  
いって二三分位名を記憶して書く遊びをした。  
先週御約束した団則三に就いての実験談を書き来週は第七、  
第八を併用して実行することに定め、御稽古はそれですませて水交社に開かれた日本ジ  
ャンボリーに一同出掛、展覧会及び運動会を拝見して丁度御帰へりになる澄ノ宮様を特  
別席で拝して帰ったのは五時であった。  
第四土曜を聖書研究日とし御稽古のない信者の方々は聖堂掃除についやすこととし  
定めて次の日より実行することとした。  
今日有益な水交社に行った事に就いて惜しいことに出席者の僅であったことである。  
出席者  
桧垣先生、細貝のぶ、溝口歌、豊、桜井くに、すみ、清忍口よ、万代子さん  
宮川敬子、瀧田いそ、後藤三重子

十一月廿二日 土曜日

今日は香蘭女学校のバザーであったので出席者は割合に少なかったが  
未信者並びに受聖餐者の聖書研究会を催し、信者方々四五人は教会の磨き物をした。  
明日は収穫感謝祭であるから磨物と飾とになほ念の入る四時半頃仕事もすんで各々家路  
についた。

十一月廿九日

集る迄 徽章磨き 戸外で名簿読み 馭者の遊び  
八百屋へ二組に別れて追跡と記憶 練習を兼ねてする

十二月六日

会員集合を待って寒いので百ヤード20秒で走るお稽古をす  
体操をして温かく成って、呼吸の練習 笑って上手に出来ませんでした。  
室内に入りて二組に別れ、二級と普通



二級 地図、アンデレ教会附近のを画く

普通会员は応急手当、包帯の巻き方

それがすんでから先生が御隣の室より変わった風をして御通り過ぎになるのを  
おぼえ書きする遊びをした。

出席 徳川、秀子、敬子、直子、伊礎子、三重子、宮川愛子、ちえ子、のぶ子

十二月十三日

クリスマスカセルを写し二列、四列に改向でもする御稽古をした。

普通団員は二級の仕度

二級団員は地図を完成する為に隣の室にて机の廻りに集って書く

それぞれクリスマスカセルを練習し、次の土曜は第三であるが聖書研究と

クリスマスプレゼントの整理をすることをきめて

明日信徒按手を受けんとする団員の為□□を祈って散会す

按手を受けた方 溝口歌子、宮川愛子、桜井すみ子、村木しん子

出席 歌子、すみ子。宮川秀子、直子、敬子、伊礎子、三重子、愛子 宮川、山田ちえ、  
白井、小西、のぶ子

十二月廿日 土

今年最後の集り

クサツ、深川に送る荷作り

以上は、細貝（黒瀬）のぶの日記に記録された1924（大正13年度）の東京1b組の一年間の活動である。当時活動に参加した会員の多くが他界された現在、貴重な記録である。概観して、メンバーの居住地は当時の東京市内で香蘭、アンデレ教会に近接する芝地区が多く、当時、郊外に新しい住宅地区として開発された千駄ヶ谷、駒沢の地番もみられる。会員はアンデレ教会に通う聖公会信徒の娘たちが中心であり、香蘭の在校生、卒業生が多く見られるが、徳川、溝口等の女子学習院の生徒が姉妹単位で加わり、府立第六高等女学校である三田の寄宿生も参加している。会員の中には活動途中での洗礼を確認することも出来る。

組長は檜垣茂で、彼女の東京女学館時代の教え子で、当時4組を担当していた井原たみ子の名前も登場する。毎週土曜日午後の定例的集会在基本であり、日曜礼拝と関連した行事もある。また香蘭女学校、東京女学館の組との合同の集りが記録されている。活動内容は、葡萄、鈴蘭、ヘアベルの3つの組を基本とし、君が代斉唱と礼拝を前後に行い、補導団の目的と規則の理解、基礎的技術（手旗信号、救助法、料理、遊戯・ゲーム音楽、看護、料理、大工、手芸）の取得が行われている。また、渉外を担当する会計、外交、買物、書

籍等の掛（係）の存在も理解され、他の団のとの交流の他、遠足の計画が記録されている。

また、3月から9月まで、檜垣がイギリスの世界会議とワールドキャンプに参加したこと、その間、副組長の山田潔子が井原たみ子の協力を得ながら組を担当していたが、9月に山田が他界したため、細貝のぶが交代した。

以降、年度別の報告を確認すると次の通りである。

1925年度は、檜垣茂によって次の報告があった<sup>23</sup>。

①組は3班構成で、1921年から数えて5年目を迎え、「団の精神」が浸透し、団員の間での親睦も深められている。

②団員数は二級団員十五名普通団員五名であり、団員中には既に料理洗濯、体育、通訳章等を持っている団員が数人いて、さらに、裁縫、音楽、編物、看護章等の取得を準備している団員も存在する。

③この組の特殊な点は、団員が一二の学校に属しているわけではなく、聖アンデレ教会の信者を中心として集まっていることである。20人位の組の中に10校の生徒が参加している。したがって、集会の時日を定めるのが非常に困難で、土曜日の午後を繰り合わせて集合しているが、姉妹の様な気分で楽しんでいる。

④団員の中の信者は小さな捧げ物の一として、毎月一度聖堂掃除の手伝をし、聖壇に花を準備する。クリスマスには養老院の老女、病人を慰問する。

⑤組長の檜垣は四組の組長を兼任しているため、この組は主に副組長の細貝のぶが担当しており、さらに組長としての活躍を切望する。

この年、鈴蘭班の宮川愛子から「楽しいお集り」として次の報告<sup>24</sup>があった。

私等東京第一B組のお集りは、毎週土曜日の午後二時半からで御座います。ヘアベルと葡萄と鈴蘭の三班で、組長の檜垣先生と副組長の細貝信子様のお導きを受けながら、それは元気に、楽しくお仕事をしております。団員達は、それぞれ異なった学校でございますけれど、私等の一番嬉しい事は、大抵の姉妹等が、聖アンデレ日曜学校のお友達同志であつたり、教会の信者である事でございます、最後の日で、なんだか疲れて、休み度いと思ふ時でも奮つて、出掛ける時、私の心には、なつかしさや、勇気が甦えつて、色々のゲームや、お仕事が元気に愉快に出来ます、そんな時は、神の国を広める兵隊の様な雄々しい気持と、ナイチンゲールの様な、広い愛と、優しさをもつて、共に手を握り合つて、進んで行き度い様な心持が溢れて、補導団のお仕事を鼓舞してくれます。私は学校から帰つて、又行くのかと思ふと、一寸、いやになる時、そんな感じを、思ひ出すと、行かないでは居られなくなります。

私等、主によつて結ばれた、親しい姉妹は、聖アンデレ教会に、属して居ります。

1926年度は、山田智恵子による大正天皇崩御に関する記事があり<sup>25</sup>、1928年度、この年から「東京第二組」として呼称された報告が檜垣茂によって行われている<sup>26</sup>（それま

での第二組である東京国際組としての活動が停止したことを意味する)。

①この二三年は組の仕事は全部副組長の細貝のぶに任せていたが、細貝のぶが家庭の事情(結婚)で集会に出席来なくなり、檜垣が毎週集りに出て、少女部員を担当することになった。

②10人以上の普通団員の中で2、3人を除いて学校や家庭の都合で規則的に出席できなくなったため、少女部団員を中心とした集りを開いている。ブラウニの中には二級章を取得して小学校を卒業するものおり、四月から普通団員に進むものに期待している。

③団員は一定の年齢になると規則的に集会に出られなくなるが、組の後援者として妹達を奨励してくれるのはありがたい。近頃は11-12人位で集りを開いている。

この都市、ブラウニからは、12月23日午後2時から香蘭女学校でガイドのクリスマスが開かれたことが報告されている。始めに佐々木主教の話があり、その後、対話やガイドの唱歌、英詩の暗誦があった。

1929年度は第二組 少女部団員10余名、指導者3名であった<sup>27</sup>。

①普通団員の班は結局結成されず、もとの団員等は家庭の事情等で規則的に集合に出られないが、時間の許す限りはブラウニの支援を行っている。集会は毎土曜日1時半から行われ、1級に進む準備を行っている。

②少女部団員のための夏季集会を開かれなかったが、指導者は箱根でのキャンプに参加した。

1930年度は、次のように報告されている<sup>28</sup>。

①東京第二組は、毎土曜日に小さな集会を続け、数は変化していないが、ブラウニの中の6名が7月に普通団員の入団式を行い、普通団員の葡萄班が復活した。

②ブラウニ2人が加わり普通団員6名、ブラウニ5名、入団志望者が1、2名存在する。普通団員とブラウニとで指導者が二人必要であるが、一指導者が病気のため、ひとりで担当している。

1931年度は次の報告があった<sup>29</sup>。

①ブラウニから普通団員に進んだ6名の組が、さらにブラウニから進んだ者があり、昨年末9人になって、変則の2班によって毎土曜日に集会を開催している。ブラウニの組は小学5、6年生は高等女学校入学準備を始めるためブラウニの集会ができなくなり、一時休止となった。昨年から指導者がひとり加わった。社会奉仕はじゅうぶん行えないが、東京の団員が協力して欠食児童のために音楽と影絵の夕を開催した。

1932年度の報告は、「人数が少いため思ふ様な集りが出来ません。止むを得ず一時休む事に致しました」<sup>30</sup>との報告があり、それまでの団員の一部は第1組あるいは第4組に所属し、他は教会の手伝いを行った。なお、ブラウニは昭和七年の暮から数名入団の準備をしている。

1933年度は「団員は極く小人数な上に、学校を卒業した団員もあつたりして定まつた集会は全く出来ないで居ります。たゞ月一回の教会の聖壇のおみがきのお手伝は続けて

居ります。ブラウニは大抵毎土曜日の二時から入団準備の集まりを致して居ります」<sup>31</sup>との報告があった。

#### 補注

東京国際組としての東京第二組は1920～23年に香蘭女学校を活動場所とし、グリーンストリートを組長として発足、聖心女子学院等に在籍するイギリス人をはじめとする外国人生徒、一部の日本人生徒が集った。国際組の活動については、最初の団員であった加藤恵美子の次のような証言がある<sup>32</sup>。

「集会は三光町の香蘭女学校で行われ、時々、芝公園の聖アンデレ教会で行われた。制服は紺色で各々の家庭で用意した。集会は厳格、ピクニックなど外に出る時は杖をもつ。普段はミス、グリーンストリートのピアノにあわせ歌をうたったりよくダンスを踊って楽しいものであった。又ある時は香蘭の牧師の食堂のテーブルセッティングをした。出席者が少ないときは、ガイドがひとり（加藤のみ）の時もあり、グリーンストリートと香蘭の庭を散策し、おしゃべりをした」

多くは近接した聖心女学校の生徒が多く、具体的にガントレット恒子の娘（山田耕筈の姪）キディ・ガントレット、アイリス・ハーリス、ミルドレッド姉妹、オーストラリア大使の娘ティリー、加藤恵美子、小原松代、大倉春代、近藤鶴代、川瀬ちえ子、吉村菊の名前が記録されている。

#### 第4節 東京第3組—聖バルナバ教会、余丁町小学校の余丁町少女団

東京第3組はもともと1921（大正10）年に聖バルナバ教会で始められた組であり、1920年から集会準備が始まった。日本女子大付属女学校の生徒を中心として発足、香蘭女学校の舎監をつとめていたG.フィリップ（Gladys Elinor Philipps）、彼女の指導を受けた三田庸子（フィリップの転出後は香蘭舎監）が中心となって、後に日本女子大の暁星寮におかれた。牛込の聖バルナバ教会、日本女子大付属女学校の組は学校での多忙さゆえに活動の継続が困難となったことが聖公会年報<sup>33</sup>からも明らかであり、内容に関する明確な記録もない。ここでは、余丁町少女団を中心に確認していきたい。

一方、後に東京3組の呼称が用いられる余丁町少女団は、1921（大正10）年に東京市の牛込区余丁町小学校で始められたものであり、訓導（教員）であった池田宜政が指導者となった組で、当初は余丁町少女団が呼称であった。小学校の4、5、6年を中心とした女子児童で結成され、東京の団長であったバンカム（Mrs. Buncombe）の協力を得たものでもあった。日本女子大の暁星寮の組が活動を停止した後に東京3組と呼称され、渡辺ひさ、国木田みどり、田山茂、福本八千代等の女性教員が協力した。

1921年にはじまった余丁町少女団については、『ガールスカウト半世紀の歩み』に池田宜政による証言があり、それによれば、概要は次の通りである<sup>34</sup>。

東京市の牛込区余丁町小学校の校長は明治末に着任した服部蒞（しげる）であり、当時

の進歩的な児童中心主義教育が行われていた。当時の余丁町小学校は通学区域内に多くの知識人が在住し、また、当時の国家公務員住宅である官舎が多く存在した地域であったため、子どもたちに先進的な教育の試みが行なわれていた<sup>35</sup>。さらに、結成された東京少年団の代表は四谷の小学校教員の小柴博であったが、その協力者であった日野鶴吉が主席訓導として余丁町小学校に着任し、1920（大正9）年に少年団（ボーイスカウト）を始めた。校長の指示もあって、ドルトンプランやデューイを学んでいた訓導・池田宜政（よしまさ＝後に作家の南洋一郎）は、小学校高学年女子を対象に少女団を1921年に発足させ、その後見人となった。

池田は、聖公会のマキム監督の長女で当時、大久保の幼稚園を運営していたマキム (Miss. Bessie M. McKim) に英語を学んでおり、彼女の紹介でイギリス人ガイドであり、香蘭女学校、東京女学館等の教員であったミス・ウィリアムス、ミス・フィリップ、ミス・チョープ、ミス・ウーレイ、さらにミセス・バンカムを紹介された。彼女たちに、ガールガイドのガイド（補導）の重要性を聞き、また、服部校長、日野主席訓導と相談した上で余丁町少女団を日本女子補導会に加盟させた。ガールガイドと同じ組織をとって、制服、団旗、パトロール旗を制定し、女子補導団が発足した際に池田は本部の事務、会計を担当している。

1923年9月の関東大震災で救助活動に活躍して注目された。余丁町少女団はやがて1924年に校長となった日野鶴吉を団長に、池田宜政を副団長として少年団日本連盟の集会・活動にも参加している。なお、池田は、1924（大正13）年世界ボーイスカウト・ジャンボリーに少女団の代表資格で参加した<sup>36</sup>。

1925年度、余丁町少女団について、池田宜政による次の報告がある<sup>37</sup>。

大正十年に余丁町小学校内の四、五、六年有志を以て組織された本団は先年の大震災に際してもその発展を止める事なく、かへつて猛火の洗礼に鍛えられて当時の物すごい惨状の中にあつて兄弟である余丁町少年団と協力して罹災者の救護や慰問に力をつくしたためその存在の理由を多くの人達に認められまして其の後年々団員数も増し只今は幹部五名団員五十二名を数へて居ります。

指導者は全部本校の訓導で、班は四つあります。自然研究社会奉仕業、天幕生活等を主な作業として居ります、昨年は海岸で臨海団を組織するつもりでしたが、都合により実行出来ませんでした、今年の夏休みには是非試みたいと計画中であります。補導団中最も若い者達の集りである本団の団員達は他の団の方々の指導を心から願つて居ります。

昨年の暮に小さい集会をいたしまして他の団の方をお招き致しました時は林伯爵夫人、ミセス・バンカムはじめ多数お出で下すつて短い時間ながら非常に愉快的な数時間を送る事の出来た事を団員一同よろこんで居ります、暖かくなりましたら郊外で第二の集会を兼ねたピクニックを催したいと思つて居ります、御参会下さる事を只今からお願いして置きます。

翌1926年には岩井の高崎海岸で行われた少年団の臨海ジャンボリーへの有志の12人の参加が報告されている<sup>38</sup>。

1927年度には、「少女団で行っている遊びの二、三」として組内で行われていたゲームの報告があった<sup>39</sup>。

1929年度から、それまでの余丁町少女団から東京第3組として報告が行われている<sup>40</sup>。

①「6年の子供が色々の都合から、規則的にお集りになられなくなりました」。第3組は少女団員二十二名、指導者四名である。団員の年齢から普通団員としてよりも少女部団員の方が適当と考へ、本年度から少女部の方に入った。桧垣茂、桜井国子の指導があった。

②夏に、千葉の上総湊で臨海集会した。毎週土曜日集会をし、少女部員の心得について練習している。

1930年度、最後の報告は次の通りである<sup>41</sup>。

①東京第3組 ブラウニ15名指導者2名、今まで毎週1回、土曜あるいは日曜日に集会をし、話、作業、遊戯、時には遠足等をした。

②新たに、富久小学校が新築され、1月中旬に余丁小学校の生徒が分れて移ることになり、12月末に、忘年会をかねた送別会を行った。その後は色々の都合でまだ集会をしていない。

#### 第5節 東京第4組—東京女学館

東京第4組は東京女学館の組で、1922年10月に平河町の MARIA 館で準備集会を行い、1923年2月に発足した。担当したのは、女学館教員のウーレイ (Amy Kathleen Woolley)、ヘイルストーン (Miss Mary Eleanor Hailstone) であったが、関東大震災後、ウーレイ、ヘールストーンは香蘭に移籍し、その後、女学館教員の桧垣茂、その教え子の井原たみ子が指導を担当し、D.E.トロット (Dorothea Elizabeth Trott) が協力した。MARIA 館は聖公会の施設であり、ウーレイ、トロットをはじめとした女性宣教師が生活し、またそこに寄宿する学生も参加した<sup>42</sup>。

東京女学館の東京第4組については、当校の出身であり、副組長をつとめた井原たみ子が、団報の第2号に「私共の生立ち」という記事を投稿している。それをもとに昭和初めまでの概要を確認したい<sup>43</sup>。

(1922年度) 東京第四組は、補導会と呼ばれていた頃の1922 (大正11) 年10月3日、雨の日の午後、ミス・ウレー、ミス・ヘールストンの指導の下、第一回の準備集会が開かれた。

(1923年度) 2月迄に、前後10回の準備集会を催して、入団に必要な諸点を学んだ。紀元節の前日である、2月10日の曇った雪どけの午後、東京第4組は結成された。当日は、団長ミセス・バンカム、第1b組の組長であった桧垣茂、その副組長で故人とな

った山田潔子が列席した。入団式が始めに挙行され、新入団の4名は柗班の班長の井原に、他の3名はけしの班長のミス・ウーレイが担当し、ウーレイが第4組の組長となった。組長と新団員との間に挙手礼交換の場面があり、団長のバンカムと桧垣組長より訓話の後、補導団の歌と『君が代』で式を閉じた。班は、柗とけしの2班、団員はミス・ウーレイとミス・ヘールストン両教員、7名の新団員に、第1b組から転籍した4名を加へて総数13名であった。結団式後、バンカムも参加して室内遊戯を楽しんだ。

5月にミス・ヘールストンが副組長となり、けし班の班長は平田信代が引き継いだ。5月の19日には神田の基督教青年会館で、女子補導団の第三回大会が行なわれ、第4組も参加した。9月には、関東大震災に遭遇し、鎌倉で静養していた団員が亡くなった。また一団員は母を亡くし、三人の団員の家は類焼した。東京にいた団員は箱根に当時滞在していた組長のウーレイの身を案じながら、互いに文通等で見舞い、励まし合って、多くの家事の手助けを行い、団員の責任として、各自その最善を尽くした。市中の団員は、救助隊を編成するような事はなかったが、団員である事に忠実な活動を行った。試練の時から教訓を学んだ。

10月9日には香蘭女学校の雨天体操場を借りて、組長と団員四名とが震災後初めての集りをした。慰問品の製作と蒐集について相談し、災害地の児童への慰問袋を10余個、「おちゃんちゃん」の製作、震災にあった第1bの檜垣組長に見舞品を送る事を決めた。その日、坂野(淡中)光子団員が、布類を寄附等の協力があった。震災の結果、今までの集合所である聖マリア館の移転が決まり、東京女学館の下渋谷の同校体操場を使用できることになった。

(1924年度)5月に菊の班、6月に桜の班がつくられ、4班となった。10月31日には池袋神学院校庭で、東京中の団員の野外集會が行なわれた。イギリスで開催された世界大会から帰国した桧垣茂の話を聞いた。

(1925年度)5月16日には、女学館の体操場に於いて団の大会が行なわれた。信号競争、応急手当競争、その他、救助結び競争などの競技を行った。その頃には、ミス・ヘールストンは副組長を辞任して香蘭に移動しており、柗の班長であつた井原が副組長見習になった。この頃、毎回集會の出席者数がひじょうに少なく、井原も学校の時間の都合で出席不可能となり、組長ミス・ウーレイが中心となって担った。7月には箱根で一週間、ミス・ウーレイ、ミス・ヘールストン指導のキャンプが行なわれ、第1a組の12名と4組の3名の団員が参加致した。また8月には、鎌倉でテント生活をしていた第1b組のキャンプに、4組から3名が参加した。

関東大震災以降、香蘭女学校で教えていた組長のウーレイが多忙のため、9月の新学期からは組長を担当出来なくなった。副組長のヘールストンも香蘭に移動していたため、第1bの組長桧垣茂が兼任を依頼した。桧垣はもともと女学館の教師であり、同校の生徒、卒業生有志から構成される第4組には適任であった。9月10日に、新しい班長會が開催さ

れ、集合日を以後毎土曜日の午後と定め、終班を当分を解散して3班構成で活動を行った。

第4組の団員は20名程で、その内には既に学校卒業の団員多く、集会に出られない団員も多い。実際には毎回の集りには、その半数にも足りない出席数であった。しかし、1925年から単独団員が設けられて、初期の頃の古い団員や、集りに出られない団員の大部分がこれに加入することが認められ、多様な参加が可能となった。

11月7日には余丁町少女団の招待による親睦のための集会があった。

(1926年度)1月から、聖ルカ病院へ毎月一回、看護法等についての講話を、他の組と一緒に聴講しに行く。4月24日に、組長の桧垣茂は世界大会出席のため渡米した。組長の留守中は小人数の集会を3度行い、5月8日の集りには林富貴子総裁の訪問があった。6月7日に桧垣が帰国し、7月3日の土曜日の集会では、キャンプの絵葉書、ホワイトハウス訪問の記念撮影、海外の花の措葉などをみせてもらう。7月10日の土曜日の午後には、女学館の体操場で補導団主宰の講演会が開催され、大江澄子と桧垣の御講演が開催された。夏休みには猪苗代湖畔でキャンプが行なわれ、第4組からは副組長と班長が参加した。この年の下半期には市中の各組が協力一致して種々の連合会合を開催した。この年、9月12日の聖アンデレ教会でのスウェーデン皇太子及夫妻の奉迎と奉送、9月18日の林総裁邸でのミス・レートン歓迎会、10月2日の三光教会での補導団礼拝式、11月3日のコミニチー・ホールでの補導団の集日、12月12日の聖アンデレ教会での「天皇陛下御平癒祈願礼拝式」等の会合があり、第4組からも少人数ながら参加した。

以上、1922年の発足準備から1926年までの東京女学館の東京第4組の活動の概要を具体的に理解することができる。なお、上記の中で、関東大震災で東京女学館が被災した際に、ウーレイ、ヘールストンが香蘭女学校に移籍する件が登場するが、東京女学館がイギリス聖公会の援助によって学校が成立した歴史に見られるように、香蘭と女学館の両校間には人事においても交流があった。香蘭の第5代校長である富田俊子は、東京女学館の第1回卒業生であり、香蘭の東京第1組、初代副組長の荒畑元子も1908年の卒業生である。また、東京女学館で英語を担当し、第1組b、第2組、第4組を担当した桧垣茂は香蘭の卒業生である。

1925年度は、桧垣シゲルによって次の報告があった(概略)<sup>44</sup>。

①組長のウーレイが香蘭に移動し御辞任したので、桧垣が9月以降に副組長、班長等と協力して活動を行う。名簿上の団員数は2級団員9名、普通団員11名合計20人であるが、当分集りに出られない団員が5人おり、実際は極く小さな組で、集りの人数が少なくて心細いこともある。

②毎週土曜日午後1時15分から2時半迄東京女学館の体操場で集会を開いて、普通団員は2級団員になる準備、2級団員は上達章を得る準備をしている。

③夏休みにはウーレイと箱根のキャンプに行き、桧垣と鎌倉のテントへ参加した団員も数人いた。



1927年度は次の近況報告があった<sup>45</sup>。

①夏期休暇前に16名、休暇中の野外集会で2名、9月以降に5名の新団員が加入し、一度休止した柗班を6月から復活し、4班となった。高松宮邸の夏季集会には組長、副組長団員10名が参加した。

②赤十字病院前の東京女学館で毎水曜日に集りをし、毎回20名余の出席者がある。1、2年生が多く、にぎやかであり、檜垣は入団した新しい団員達の2級章取得の準備をしている。

③来日したイギリスにおいて団長経験のあるミス・ポールの指導も時々得られるようになった。

1928年度は、菊班の本庄里子から報告があった<sup>46</sup>。

①毎水曜日、檜垣組長、井原副組長の指導で紐結び、看護法、手旗信号、自然研究を行っている。時々、ミス・ポールがダンスを丁寧に指導してくれる。

②団員一同馬蹄形になり君が代を斉唱し、三指の礼をして集会を終了する。

1929年度の報告は次の通りであった<sup>47</sup>。

①普通団員数28名、指導者2名であり、毎週1回水曜日の午後、渋谷の東京女学館体操場で檜垣組長の指導を得ている。

②7月10日から2泊で逗子の三橋家の別荘でキャンプを行った。炊飯等の作業も行った。

③箱根のキャンプの時入団した女学館教員で体操を担当している小久保が第4組に属することになり、集会を補助している。女学館の旧校舎内の小さな一室を借りて補導団の部屋として活用し、団員達の採集物その他を飾っている。

④集会の出席団員数は毎回15-20名で、入団準備中の者が6、7名いる。団員は専ら2級になる支度をしているが、既に数名が最近2級章を得た。2級に進級の際、一番困難なのは自然研究である。集会でも、遊びとして断片的な自然研究の間が出る事がある。事物を注意深く正確に観察する事を学び、自然界の驚異に対する興味を少しずつ開いている。

1930年度は次の通りである<sup>48</sup>。

①普通団員25名指導者数2名、毎水曜日午後2時に東京女学館で檜垣組長指導で集会を続ける。校舎地下室の使用されていない広い一教室を借りている。集まる人数は毎週1

②夏は、三橋、岸両家の好意で逗子でキャンプを催し、約10名の者が参加した。

1931年度はバザーの報告があった<sup>49</sup>。

①学校の御好意に応える必要もあり、団員の希望から組長、副組長、旧団員の援助を得て秋のバザーを開催し、その利益を女学館に寄附することになった。夏休み中、バザーにそなえて品物を製造し、ドレスिंग、人形をつくり、11月27日に女学館の合併教室と音楽室とを借りて、午後からバザーが開催した。1時半と3時の2回興行で、各班創作並びに演出のスタントや英詩暗誦、ピアノ連弾、キャンプソング等々を余興として披露した。

154円といふ予想外の純益を得て、その純益は全部女学館に寄附し人体模型一台を購入することになった。

②平常は、水曜日午後2時からガイドの部屋で集会を行っている。

1932年度は、次のような報告があった<sup>50</sup>。

1932年3月の卒業式後、団員中5名が卒業し、また、学校時間の都合上から組の集會に出席不可能な団員も6-7名おり、7月に一度解散して9月から時間の都合のつく団員のみで新たに組を立直すため、下級生から入団志願者6-7名で集会を続けている状態である。

1933年度の東京第四組は次の通りである<sup>51</sup>。

①小さな集会を継続している。

②ミス・トロットが帰英中、ミス・ウーレイが女学館に教えにくるため、毎月1回の集会を指導している。

③2人の入団者があり、さらに入団志願者が1人いるが、学校の時間割の関係上集会参加が困難である。スイスの集会への出品物の製作に忙しい。

## 小結

本章では、戦前のガールガイド運動の起点である香蘭女学校の東京第1組aとブラウニ、アンデレ教会を中心とした東京1組bとブラウニ（後の第2組）、バルナバ教会と日本女子大暁星寮の第3組、余丁町少女団（後の第3組）、東京女学館の第4組についてあとづけた。その概要は次の通りである。

香蘭女学校では、M. グリーンストリートを指導者として発足し、その後、香蘭の英国人教員である T.C. ウィリアムス、A.K. ウーレイ、M.E. ヘールストンが担当し、荒畑元子、細貝のぶ、竹井富美子、櫻井澄子等、多くのリーダーを輩出した。ブラウニについては、1930年前後から活動が停滞するが、普通組は1942年まで活動した。

アンデレ教会は、婦人伝道師、東京女学館教師をつとめた桧垣茂、細貝のぶ、井原たみ子、溝口歌子、樋戸けい子が指導した。アンデレ教会の家族、教会の日曜学校の子ども、単独会員、特別賛助会員も参加した教会信徒との結びつきが強い組である。小学校児童を中心に東京第2組ブラウニは、女学校受験等の問題から1931年に休会した。

バルナバ教会、日本女子大暁星寮では、香蘭女学校の G. フィリップ、三田庸子为中心となり、後に日本女子大の暁星寮におかれた。1920年から集会準備を始めたが、大学生、女学生の多忙から大正末に休会した。

余丁町少女団は、池田宜政と余丁町小学校教員が指導者。聖公会のバンカム、B. マキムの協力を得るが、児童中心主義教育とした学校長の教育方針として少年団、少女団に取り組み、小学校の高学年生を中心に結成された。少年団との結びつきも強かったが、1929年頃から高学年生徒の都合、近隣の学校新設と生徒の移動から停滞した。

東京女学館は、A.K. ウーレイ、M.E. ヘールストン、桧垣茂、井原たみ子の指導、D.E. ト

ロット、ポールの協力で活動を行った。1922年に平河町のマリア館で準備集会をし、1923年に正式発足した。教員人事を含めた香蘭との交流、補導団活動での交流も深かったが、1933年度頃より授業時間の都合で活動が停滞した。

なお、1940年に山口敏子の指導により千住キリスト教会で東京第5組が発足していることを指摘しておきたい<sup>52</sup>。

註：

- 1 櫻井くに子「私のガールスカウト体験記・第四回」ガールスカウト日本連盟『リーダーの友』38・39合併号、1976年、12月5日号、34 - 35 ページ。
- 2 黒瀬のぶ「私のガールスカウト体験記・第七回」ガールスカウト日本連盟『リーダーの友』43号、1976年、12月5日号、26 - 27 ページ。
- 3 『日本聖公会教役者名簿』日本聖公会歴史編纂委員会・1981年等による。
- 4 『ガールスカウト半世紀の歩み』1971年、49 ページ。
- 5 『松蔭女子学院百年史』1992年、138 - 139 ページ。
- 6 『東京女学館百年史』1991年、384 - 389 ページ。
- 7 『女子補導団』第2号・1927年3月、21 ページ。
- 8 同前、39 - 40 ページ。
- 9 『女子補導団』第3号・1928年3月、7 - 8 ページ。
- 10 同前、8 - 9 ページ。
- 11 『女子補導団』第4号・1929年3月、10 ページ。
- 12 『女子補導団』第5号・1930年3月、8 ページ。
- 13 同前。
- 14 『女子補導団』第6号・1931年3月、3 ページ。
- 15 同前、3 - 4 ページ。
- 16 『女子補導団』第7号・1932年3月、3 ページ。
- 17 同前、4 ページ。
- 18 『女子補導団』第8号・1933年3月、4 ページ。
- 19 同前、5 ページ。
- 20 『女子補導団』第9号・1934年3月、4 ページ。
- 21 同前、4 - 5 ページ。
- 22 細貝のぶノート（1924年以降、戦後まで）、ガールスカウト日本連盟蔵。
- 23 『女子補導団』創刊号・1926年3月、5 - 6 ページ。
- 24 同前、6 - 7 ページ。
- 25 『女子補導団』第2号・1927年3月、44 ページ。
- 26 『女子補導団』第4号・1929年3月、16 - 17 ページ。
- 27 『女子補導団』第5号・1930年3月、8 ページ。
- 28 『女子補導団』第6号・1931年3月、4 ページ。
- 29 『女子補導団』第7号・1932年3月、4 - 5 ページ。
- 30 『女子補導団』第8号・1933年3月、5 ページ。
- 31 『女子補導団』第9号・1934年3月、5 ページ。
- 32 ガールスカウト日本連盟役員、永井かよ子、松山まさえによる加藤恵美子への聞き取り、1996年1月31日加藤宅にて（ガールスカウト日本連盟蔵）。
- 33 前掲、The Guild of S.Paul『Annual Report and Statement of Accounts 1921』1921年、32 ページ（4章で述べたように学校のカリキュラムの関係から女子大学生の活動

の困難さが指摘されている)。

34 『ガールスカウト半世紀の歩み』1971年、35 - 36 ページ。

35 新宿区立余丁町小学校『学校のある風景』1988年、新宿区立余丁町小学校『開校90年記念誌 余丁町』1991年。元東京教育大教授の家永三郎も同校の1926年の卒業生であり、前者には、大正期の同校の進歩的な教育活動について回想が所収されている。

36 その成果は、先述したように、1924(大正13)年度の東京府の欧州地区視察報告として「歐洲各國ニ於ケル少國民ノ訓練」(東京市牛込区青年団)に執筆され、さらに「懐かしき丁抹の少年」を『少年倶楽部』1926に執筆して、作家デビューした。

37 『女子補導団』創刊号・1926年、7 ページ。

38 『女子補導団』第2号・1927年3月、26 - 30 ページ。

39 『女子補導団』第3号・1928年、29 ページ。概要は次の通りである。

1、班別にして各班の中から一人を選び、某者を十米位前方に臥せさせておく。班員各自はそれぞれに、帽子、ユニホーム靴、バンド、スカーフ、ナイフ、縄などをもち、合図によって馳つけ順序正しく早く装はせた班が勝ち。

2、各班がボールを足で蹴り乍ら、前方にある棒を一巡し、自班に帰り着てから次の者の団の真中へボールを置くこと、若し入らなければ幾度でもやり直して、早い方が勝ち。

3、各班員のスカーフをそれぞれ結び合せて、高所から地上へそれを伝って降ること。早く又布の結び目が正しかつた方が勝ち(火災時の練習の応用)

4、サイダ又はビールの瓶に水を満たしたものと、入らぬものとを二本並べ、入った方から入らぬ方へ水を移し入れる。班員各自が是を繰り返すこと。但しいくら早くても最後に残った水が少なければ駄目。

5、全体で円形を作り鬼をきめて、一人の者誰でも肩を打ち一緒に反対の方向に走らせてすれ違った時、『おはよう。今日は、さよなら』の三語を云ひながら握手し、いい終って手を放し、元の場所へ帰る、おそかった者は鬼となる。

6、各班別にて、最初の者が三米位前方に、合図で馳せてとゞまる。二番目の者が縄を先の者になげると、前方の者は体に結びつける。こちらの者が引張ること、これを順々に繰り返すこと。

40 『女子補導団』第5号・1930年、8 ページ。

41 『女子補導団』第6号・1931年、4 ページ。

42 東京第4組(東京女学館)の確認された団員は下記の通りである。

1923 正式発足時 終 けし 平田信代、淡中(坂野)光子アンデレの組から4人合流(井原たみ子他)

1924 菊と桜

1928 けし・守屋春子、鈴木静子 菊・本庄里子、八木沢小枝子、平野(磯田)百合子 桜・瀬古美年子、白石杏子、田中稲子 終・高西芥子けし・小河喜代子

1929 月見草・池田菊代、かんな・揚井栗子、樋口みえ子、杉浦八重子、三浦八重子、高橋千枝子 桧垣茂・五十嵐くに子

1930 菊・高橋千枝子 桜・天野清江、瀬古美年子 終・増田恭子

1931 江連八代子

西那須野三島邸キャンプに桧垣茂、萩原綾子、江連八代子、増田恭子が参加

1932 この時期、桧垣茂、内田千枝子、増田恭子等、5 - 6人の小さい団員の活動

1933 江連八代子、内田千枝子が指導者に 高橋千枝子、罌粟班・大田孝子

43 『女子補導団』第2号・1927年3月、17 - 21 ページ。

44 『女子補導団』創刊号・1926年3月、7 ページ。

45 『女子補導団』第3号・1928年3月、8 ページ。

46 『女子補導団』第4号・1928年3月、9 ページ。

47 『女子補導団』第5号・1930年3月、8 - 9 ページ。

- 
- 48 『女子補導団』第6号・1931年3月、4ページ。  
49 『女子補導団』第7号・1932年3月、5ページ。  
50 『女子補導団』第8号・1933年3月、5-6ページ。  
51 『女子補導団』第9号・1934年3月、5ページ。  
52 前掲『ガールスカウト半世紀の歩み』29ページ。